

## 第43回レーザセンシングシンポジウム開催趣意書

### 第43回レーザセンシングシンポジウム

実行委員長 大学共同利用機関法人 情報・システム研究機構  
国立極地研究所 江尻 省

レーザセンシングシンポジウムは、国内最大のレーザレーダ（ライダー）に関する学術会議であり、ライダーを代表とする様々なレーザセンシングに関わる全国の研究者や技術者の発表と情報交換の場となっています。1972年に本シンポジウムが第1回レーザ・レーダシンポジウムの名称で開催された際に、日本のライダー研究の先駆者である稲場文男東北大学教授を会長としてレーザ・レーダ研究会を組織し、以来、第12回で現在の名称に変更しながら本シンポジウムの継続的な開催、及びレーザセンシング技術の向上と普及に関する活動を進めてきました。レーザ・レーダ研究会は、日本で開催された過去3回の国際レーザレーダ会議（ILRC）（1974年仙台、1994年仙台、2006年奈良）の現地実行委員会を構成するなど、国際的な活動にも大いに貢献してきました。2018年には、研究会を「レーザセンシング学会」と改称して学会としての活動を開始し、2022年には「一般社団法人レーザセンシング学会」として法人登記を行い、より組織的な活動を進めています。来る2026年7月には第32回国際レーザレーダ会議（ILRC32）を広島で開催することも決定しており、積極的な国際貢献も続けています。

本シンポジウムでは、ライダー、レーザ、レーザ分光、レーザ計測など、広範なレーザセンシング技術に関する最新の学術成果や観測研究が発表され、これらの技術がもたらす将来展望についての議論も行われます。ライダー技術はスマートフォンに搭載されるなど、私たちの生活に密接に関わる技術として急速に普及しており、自動運転技術における安全性の向上や気象予測精度向上など、さまざまな分野への応用も図られています。本シンポジウムはレーザセンシングの装置開発、計測技術、データ解析、運用技術など、様々な技術分野の専門家に加え、大気・海洋・気象・環境科学関係などの様々な活用分野の専門家が発表および情報交換を行う場として、重要な役割を担ってきました。

前回の第42回シンポジウムは2024年9月12-13日に大阪市の大阪大学中之島センターで開催され、現地102名、オンライン8名の参加者があり、口頭33件、ポスター27件の一般講演と2件の特別講演、企業展示10件が行われました。今回は、東京都立川市の国立極地研究所を会場として開催いたします。国立極地研究所は日本の極地科学研究の中心的な拠点であり、南極圏と北極圏に観測基地を持ち、極域での観測を基盤にした総合研究を牽引する研究機関です。本シンポジウムを開催する9月初旬は、今年出発する南極観測隊の準備が佳境を迎える時期でもあり、活気溢れる極域観測研究およびそれに携わる研究者や技術者とも交流する絶好の機会となると期待しています。

本シンポジウムが、レーザセンシング技術に関連する研究者や技術者、また協賛企業の皆様との交流を深め、今後の技術の発展に寄与することを強く望んでいます。研究者、技術者、企業の皆様のご参加を心よりお待ちしております。